同胞に寄す[[1]](#footnote-1)

香山光郎

同胞に寄す【1】[[2]](#footnote-2)

君と僕

、はにすべてをぶちまけよう。もうその時期に達したのだ、はの心との心とを同時に熟させたことゝ信ずる。そしてに語りたい心が起ればには、聽きたい心が用意されてゐると思ふ、そしてのへることは一も二もなく君の胸奥に通ずることと思ふのだ。そしてがとぶのは大和全を指すのであつて、と自称するのは半人全をひつくるめたものと思つて貰ひたい。

。達は、これから本富に一つにならなければならないんだ。そして日本といふ同じにつて遠のを渡らなければならないんだ。これはにたゞごとぢやないのだ。かつて人がさへしたことのない大事なのだ。

　、にして見れば、のいふことは大して耳新しくもないことかも知れぬ。なんだ朝が日本と一つになつたのは、既に三十年も前からのことぢやないか、といつてしまふかも知れぬ。うむ、それはもつとなことだ。日韓併合の成つたのは明治四三年で、昭和十五年の今から數へて丁度三十周年だ。だからが、これから、達…ととだよ…が本當に一つにならなければならないなんてぶのは、可笑しくくだらう。

　しかし、とへてくれたまへ、併合當時から今日までの兩のは、はのものであつたぜ。といふは眞心からでなかつたといふことだ。これはだ以てかならぬいひ分かも知れないが、の見るところではそれが眞なんだよ。少なくもの心持は過去三十年間いやいやながら引きずられて來たのだよ。眞に吾は、天皇の赤子なり、吾は大日本國のなりといふ自からぢやなかつたのだ。それはむにまれぬ服從だと思つてゐたのだ。過にだつては日もげたさ、萬も和したさ、しかしながらそれは眞のから出たのではなかつたのだ。

　の方でも、のこの心持は氣付いてゐたことと思ふ。そしてしからんともしたであらう。

よ。のももつともだ。日本國民になつてゐながら、國家にをはぬとなれば、それは許すべからざるであらう。殺してしまつてもしくないであらう。しかしだ、同じ日本國でありながら、同じ日本國が、國家に對してずるがぜられなかつた、のにもなつて見たまへ。それはの心持よりも幾倍つらかつたらうではないか。たるには、その邊の消息が察せられるだ。

しかし。それはもう過去のことだよ。にり去られたことだよ。だから今更、そんな、身の上話しなんかする必要はないんだ。今後のことをらうではないか。とが一つに、いつまでも一つに、力づくではなくて、いやいやながらでもなくて、一方が一方にきずられてゞもなくて、眞にお互に心と心とがれ合ひ、眞にお互にし合ひ、引き立て合つて、力のよりい、のより高い日本を造り上げる相談をしようではないか。

同胞に寄す【2】[[3]](#footnote-3)

僕の懺悔

、はよくにひねくれてゐるとつたね。意地で邪だとつたね。人のふことや心持を直に入れないとつたね。、自白する。のふことは當つてゐるよ。

一言にしてへば、それは繼子性であつたのだ。爲政者が半人に對して行ふ政はすべての意や利を中にいてゐないものとしてゐたのだ。

　しかし、からがめた今日になつて見れば、過去三十年間において、のためになされたすべてのことは、いづれものことをひたまふ大御心のあらはれであつたといふことがはつきりする。通が開けた、が及された、衛生施設がされた、は確保され、は振された、吾々は三十年前にべて非に高いをしてゐる、これらのことが一同の大御心のあらはれでなくて何んであらう。

然るによ、は、どうして、いまゝで、これ等の事をさへ、のためになされたのではないと曲解しなければならない、ひねくれてゐたのであらう。さうだ。これらの事を、いくらだつて見なかつたではなかつた。見たことはかに見たのであるが、それはのためになされたのではないと、くく自らにひかせたまでのことである。朝におけるが發達すれば發達する、が高まれば高まる、はそれらのから生ずるきものを克明に蒐集して、そして、かゝるがに、これらのものはの利益になるものではない、反つて、の幸福と生命とを荼するものであるとのにいたのだ。

　よ。のつてゐることは、張でもなんでもない。通り眞なのだ。をかしいと思つたらどんな半島人でもつかまへて、ざつくばらんに訊いて見たまへ。でも、と同様のことをに告げるにひないのだ。

のやうに、直につたものには、のかういふひねくれはしにくいかも知れぬ。ところが今から考へて見れば、かうも永くかうも徹底的に、の眼を迷はした原因があつたんだ。

その原といふのは、第一は、國の地政である。は度や安南のを眼の當り見てゐたのだし、東京の大學に於て政といふものゝをかされてゐたんだ。それでは、朝も度や安南とを同じうするものとつてゐたのだ、取と隷、これがにへられたとつてゐたのだ。

　よ。過三十年間、爲政者や間の人達が、内地と朝との關は、決して母國と地との關ではないぞ、一同の大御心を體したてまつつて治められてゐるのだぞと分切に、につてもくれた。しかしには直にそれをけ入れる心のはなかつた。そして或はそれを、[を]するための氣休めとふか、でなければ、その人自も爲政者の眞の意圖を知らない人道主者だらうにしか取らなかつたのだ。

　何？　何は、かくも、爲政者や間人の切な意見をさへも、意にばかりしたのであらう。そこに第二の原があるのだ。

それはかにな、なんらのもへられてゐなか[つ]たことだ。は今より十四五年前までは、何に兵役の義務をへない[の]だらうと、だから一同ではないのだとしたものだが、その後、もつとになつて、はかういふ風に理するやうになつた。ち、もし半人を眞に日本として、平等に取りふのなら、まづを施すべきであらう。それから兵令を朝で施行すべきであらう。さうなれば、 も一同の大御心にひたてまつるやうに朝が治められてゐると、めて信ずることが出来ると。

さうではないか、。の理も萬無でもないではないか。

同胞に寄す【3】[[4]](#footnote-4)

僞はらぬ懺悔

　參政のことは何故いはないのかと、それはいふ必要がないではないか。が施され、兵令が施されて、朝人の子達が全國をけ、そしてその丁が――の男の子がだよ――兵になつてをとつてに起つ。

　よ、かうなればは全に日本になりをはせたのではないか。それは形式的な制度ばかりではないんだ。の子供が　陛下のに入つてをれば、は心から日本にならざるを得ないではないか。

　は、のいふことが本末だといふのか。がになり切つてからでなければ子は兵には取れぬといふのか。、、こそ、のの謬につてゐるのだ。

　よ、はに重大なことを告げるつもりだ。それはでもない朝の衆は、その、國に餓ゑ渇えてゐるのだと。よしやが拗ねたところを見せるにしても、それは自分が、おほつぴらに、日本となれないからだし、またなれさうもない、なれつこはないとふ自暴からであるのだ。

　よ、は度も度も、『お前には國家に對する忠がない』とられて來た。それは正にその通りだ。には一つも忠はなかつたのだ。忠どころか、さへあればといふやうな不な心さへも全然なかつたとはへない。

　然しよ、はかうひはりたかつたのだ。に忠をす會をへよと。に、地の土人としてゞなく、陛下の赤子として、國の平等たる一員として、日本をし、日本を國とし、そしてこれを護るために、生をげるやうに仕けてくれよと、會をへてくれよと。

しかしは、いまだかつて、そんなことをに出していつたためしがない。何かといふに、それは通らぬことゝめてゐたからだ。

よ、、がにあてゝ呼びかけるのはこれが最初だよ。は、のことならいざ知らず、朝鮮をどうしてくれ、かうしてくれといふことに關しては、いまだ一言もいつたこともないし、一行のを書いたこともないのだ、それは、そんなことをいつたつて何にもならぬと、くめてゐたからである。

　よ、度人に國をせよとつたところで、それは興だよ。安南人にフランスのために生をてろとつたところで、力づくで駈り出せば知らぬこと、心から忠をげる氣になるがないではないか。それでは、のひねくれを通して來たのだ。

　しかし、今日といふ今日は、は、しみと、びとを以てに呼びかけたくなつたのだ。の心を三十年が間も閉ざしてをつた劫のはけたのだ。は心からを同胞とふやうになつたのだ。はしい。とてもしい。この手紙を書いてゐると、まるで人に手紙を書く時のやうにがわくわくするのだ。もこの手紙を讀む時には、らの拙い文字から、の心のしい鼓をき取つてれるものと思ふ。そしてが今しがつてゐるやうにもんでれることゝ信ずる、

　がどうして、かうつたのかと。さうだ。それを話さう。それこそはがもつともひたいことであり、の方でも、一番聞きたいことであらう。

　は、の大御心を感じたのだ。一言にしてへばこれだ。

かたくなゝの心のを開ひてれたのは支事と南であつた。支那事變はアジヤの將來のと日本の國家貢献及び神をにしてれたし、南は『東新の建設は内一をとする』と明して、の差別撤、兵制度などを實行せられた。そして最近は氏制度の實施をもされた。朝當局者の明によれば、昭和二十五年度までには義のが完成するだらうし、また近いうちには事實上の兵――卽ち兵の増加によつて、國を受けたもの全に兵を實施することになるだらうといひ、また南自身もなるべく早く朝に兵令を實施するやうにしたいといはれてゐる。しかもこれらの政策は、決して人れば政策る底のものではなく、上奏をて國策化されたものだと承つてゐる。

　これで、何にひねくれたもつひに國家が朝に對する眞意を理し、信するやうになつたわけだ。　　　　　　　　　　　　｀

　『すめらぎの神ととにつらなりて大和も高麗も一つなるかも』

とふことになつたのだ。これはのらざる懺悔だ。

同胞に寄す【4】[[5]](#footnote-5)

内鮮一體の可能性

君は、上述の僕の懺悔を聞いて、成程、結構だと思ふだらう。半島人が、さういふ風に思つてくれることは、國家のために慶すべきことだと思ふだらう。しかしの胸を割つて見れば、尚、釋然たらざる點が、一つや二つ殘つてゐるかも知れない。といふのは、第一半島人にどれだけ信用が置けるかといふことであらうし、第二には、隨分永く歴史を異にしてゐた兩民族が、さう巧く、渾然たる一體になり得るだらうかといふ疑問であると思ふ。

　君よ、僕はまづ、第二の疑問から取り上げたい。それは第二の疑問が解ければ、第一の疑問は自から解ける性質のものであるからだ。

　歴史の違ふ兩民族が――といふことは君ばかりの心配ではないのだ。半島人自身もまた、このことについては確信をもたないものが多いと思ふ。

　若しも英國人と印度人とが渾然一體となるのだといつたら、恐らく、天下誰一人これを信ずるものはあるまい。それは血統も文化もあまりにかけ離れてをり、それに地理的にも決して唇歯輛車の關係ではないからだ。マハトマ・ガンヂーやラピンドラナース・タゴールが如何に英國の言葉に堪能になり、英國の風俗や習慣にすつかり同化したとしたところで、誰の眼にも彼は英國人とは映らないだらう。しかも、キリスト教文明と印度教文明とは決して調和さるべき性質のものではないのだ。しかし英國民とアメリカ合衆國民とが、一りになるとしたら、それは肯かれることではないか、この兩國がもし地理的に相接近してゐると假定したら、最初から分離もしなかつたであらうし、また一旦分離したにしても、とうに再び一緒になつたことゝ思ふ。

　君よ。日本と朝鮮との關係は英國と印度との關係に比べられるべきではないのだ。なるほど過去數千年間違つた地域に分れて違つた國民生活をして来たことは事實であるが、上古の同祖同根は別として、違つた國民生活をしてゐた間にも、血と文化は絶えず交流してゐたのだ。今の日本人に朝鮮半島系の血統を直接ひいてゐると推斷されるべきものだけでもその數一千八百萬を下らないだらうといふことだ。之は平安朝時代の新撰姓氏録其他記録に殘つた材料から推算したものであるが、姓氏録にものらない移住民の方が、のつたそれよりも多かつたかも知れない。かく觀じ來れば、日本民族と朝鮮民族との關係係が、英國人とアメリカ合衆國人の関係に、血統的に比べられるといふ僕の言は、決して妄とはいはれない筈だ。

第一顔が似てゐるではないか。言葉と着物とを抜きにすれば、どつちがどつちだか區別がつかぬではないか。君と僕とどこかでひょつこり出會つたとしたら、話し合つて見ないことには、日本人だか朝鮮人だか解らないだらうではないか。

次に文化のことを考へて見よう。第一神道からして、兩土共通だよ。朝鮮から古神道的色彩を取り除き始めたのは李朝の成宗中宗頃からで、四百年ばかり前だ。それは儒教が盛んになつて支那崇拝思想に中毒したからであつた。しかしながら、今尚朝鮮民族の宗教感情は古神道と佛教との混合されたもので、これは内地と變りはない。

　今日内地で崇拜されてゐる神様で、朝鮮から移された来歴の明瞭なものだけでも、京都の平野神社の御神靈を首め、數多き白山神社等數ふるに遑ない程である。

　次に佛教における兩土の關係は余りに周知のことで殊更喋々する必要もないと思ふ。日本佛教の傅來が百濟からであつて、聖徳太子に法華經の御講義を申上げたのが高句麗の僧慧慈で、どこそこの佛像や寺院がどうの――と事新らしく並べ立てるにも及ぶまいと思ふ。

儒教もさうだ。美術工藝もさうだ。

同胞に寄す【5】[[6]](#footnote-6)

兵站基地として

　神道、儒教、佛教、美術、工藝そして言語、これらを併せたものが文化ではないか。この文化から生れたものが思想であり、人情、風俗であり、國民精神であるのだ。言語にしたつて、日本語に吸収されてゐる朝鮮語源の言葉は、英語におけるラテン語の數より少なくはないと思ふ。

　だから君。君と僕とは血統から見ても、文化から見ても従兄弟同志なんだよ。それ以外ではないのだ。それだからは、血統と文化の點から見て君と僕とが、同じ神の氏子となり、同じ天皇の臣民になることに何等の無理も、取つてつけもないと思ふ。

しかし、血統や文化ばかりで内鮮一體が成り立つものでもないだらう。それは英國とアメリカ合衆國とが一つにならないのを見ても解る。兩民族が一つの國民に結合するには、理想と利害の一致が必要なのだ。しからば君と僕とは理想と利害が一致してゐるのか。この點がはつきりすれば、達の理論はもう終りになるわけだ。

君よ。朝鮮は日本の大陸經營の兵站基地と稱へられてゐる。それはもつともなことだ。しかし、單に兵姑基地とのみいつてしまへば、恰もその土地だけを指すやうにも取られる。朝鮮半島の地が地理的關係からして、兵站基地の役を勤めるものゝやうに聞える。然しはさうだとのみ思つてはゐない。朝鮮半島の住民も、兵站基地の役目をなすのではないかと思ふ。卽ち朝鮮人の心が日本の大陸經營への兵站基地にならなければならないといふことだ。

　君は僕のいふことが俄に首肯出來ないのか。無理もないことだ。

　第一朝鮮が帝國の兵站基地となるには、朝鮮人の忠誠が第一要件だといふ意味だ。假定することさへも甚だ不吉なことであるが、何かの時に、二千三百萬もある朝鮮人が、悪い心を起したと假定してみたまへ。そしてそれが或る非常時であると想像してみたまへ。さうしたら兵站基地はどうなることか。論ずるまでもないことではないか。

　朝鮮人が日本はわが祖國だ、日本榮えてこそ朝鮮人の生存も繁榮もあるのだ、と確信することを前提としてこそ、兵站基地は安全性を確保するのだ。

　朝鮮牛島が兵站基地になるといふことには、重工業のそれをも舎むことだらう。今や鴨綠江、漢江下流は大工業地帶化しようとしてゐる。豊富な水電と、勞力と、敷地と、そして大陸市場への距離との關係で、支那事變も圓滿におさまつたら、朝鮮は急速度的に工業地帶化されるものと思ふが、軍事的、政治的兵站基地に劣らず、此産業的兵站基地を護るのも朝鮮人の愛國心に俟たなければならない。

それから君よ。もつともつと大事なことで、國家が朝鮮人の忠誠に俟つものがあるのだ。それは人的資源である。他の方面は暫く措き國防における人的資源を朝鮮人に求めないで済むものだらうか。國境は事變前の十幾倍も延びたではないか、滿洲國ばかりではない新生支那まで防護する任務を負はされてゐるではないか。しかるに敵國たるべき蓋然性のある相手國の數は殖え、危機は日に日に深刻化しつゝあるのではないか。しからば日本は今後益々兵力を必要とするであらう。しかも、今次事變關係で、今から二十年後の壮丁數は減るわけなのだ。くどくどしく語る必要もあるまい。朝鮮人は日本の國防力の三分の一を擔ふ必要があるのだ。

同胞に寄す【6】[[7]](#footnote-7)

白日の夢なりや

　君よ。僕はこれを喜んで居る。即ち自分が眞に帝國の運命に重要な役割をもつてゐることを喜ぶわけだ。かゝる重責を感すればこそ内鮮一體の要もあり、甲斐もあるといふものだ。

　君よ。今まで、爲政者は、朝鮮人に對して、この責任の重大さを云つて呉れたものはなかつた。それは、或は、こんなことを云つて聞かせたら朝鮮人が思ひ上がるとでも思つてゐたのだらう。おれたちは、これ程國家に對して重要な任務を負うてゐるのだと威張つて付け上がつて無理難題でも突付けることを虞れたのだらう。實際、朝鮮人は付け上がるといふことを一部の人士は口癖のやうに云つてゐるやうであるが、それは大人げもない考へ方だ。かういふ點でなら、大いに付上がらせて好いではないか。大いに付上がらせて大いに愛国心を奮起して貰へば、それに越したことはないではないか。何も、國防的必要上から見れば朝鮮人に出て貰はなくても好いが、などと態とらしいことをいふ必要はないと思ふ。もつとも、朝鮮人から志願兵をとることになつたのは――事變以来朝鮮人が現はした愛國心を嘉みしたまうての、慈しみ深き大御心から、朝鮮人も神聖な國防に與はる機會を賜はつたのであつて、差しあたり、三千や一萬の兵力を補充する必要に驅られてのことでないといふこと位は魯鈍なる僕の如きといへども、能く承知し感謝してゐることだ。しかし、將來、お前たちは帝國の國運を雙肩に荷ふのだぞ――といつて呉れたら朝鮮人たちはどんなにか喜び、どんなにか感激することだらう。

　飜つてこれを朝鮮人自身の立場から見れば、今朝鮮人に殘されてゐる唯一の希望は、平等かつ同等な日本國民になることだ。これを措いては何もないのだ。彼等は既に、日本から分離しようなんていふ空想は棄てゝしまつた。子々孫々平等かつ同等の日本國民としての光榮を享受することが出來るのなら、何を苦しんで、大日本帝國といふ、廣々とした働き場を棄てゝせゝこましい小國家を建てようなんていふ料簡を起さう。唯彼等が恐れてゐたのは、國民の庶子の運命にいつまでも繋がれてゐるのではなからうかといふ、不透明な展望であつた。それは實際重苦しいことに相違ないのだ。

　しかるに、吾々は已に、特別志願兵としてではあるが、半島人の壯丁が立派に國軍に編入せられるのを見たし、近き將來においては國民皆兵として國防の義務を負ふことを約束されてゐる。半島人がこの義務さへ立派に果せたら、もう問題はないではないか。陛下の陸海軍の中に朝鮮人兵士や士官が四分の一も乃至三分の一も加はつてゐるものと想像して見たまへ。これで内鮮一體は完成されたのではないだらうか。

　政治參與の問題も早晩解決されるであらうことはいふまでもない。要は僕が君と同じ水準に達し、同じ感情に脈うつことだ。一視同仁の御趣旨は僕を必ずや全然無差別の水準に引き上げたまふであらうと信ずる。

それが如何なる形式をとつてなされるか、それは僕に知る由もないことであるが、假りに内地同様の選擧權が、朝鮮にも賦與されるとしたら、國會議員全體の約四分乃至三分の一は朝鮮人であるだらうぢやないか。そして行く中にはおそかれ早かれ、朝鮮人出身の大臣や大將を見る日もあることであらう。

かうなれば、すでに内鮮一體といふ言葉も單に歴史的存在としてしか用はなくなる。その時には君の子供も僕の子供も、お互ひに原籍地を調べて見てやつと、あゝ君は朝鮮人であつたか――位のことが云はれるであらう。僕は、かゝる時期は必らず來る、しかしてそれは遠くはないと信じてゐる。

　君は僕の云つてゐることを白日の夢とでも思ふのか、もしさうだつたら、はつきりと云つて呉れたまへ。否、決して君は、さう思はないことと信ずる。不幸にして、君が、僕の云つてゐることを白日の夢と思ふとすれば、すべては滅茶滅茶だ。

同胞に寄す【7】[[8]](#footnote-8)

君と僕との努力

　ところが、實際は内地人の中にも、また朝鮮人の中にも、まだ、どうかなと疑懼の念を懐いてゐるものがないではないんだ。こゝに君と僕との努力が要るのだ。

　第一に内地側の人にいはせれば朝鮮人は文化の程度が低い。のみならす、言葉や風習や思想の違ひで、さうたやすく内地人の水準には追ひつき兼ねると見てゐるかも知れない。然し、それは杞憂だよ。君や僕の努力の如何によつては、これから四半世紀を經たら、ほゞやつていけるだけの同じ水準に達するものと信ずる。僕の口からこんなことを云ふのはどうかと思ふけれども、君も僕も人種が違ふとか、頭惱に優劣があるとかいふ程度ではないと思ふ。又文化の差といふ程でもないではないか。朝鮮人は古代においても高度の文化を消化し旦つ創り出したのであるが、現在にも、また將來に於いても、その能力を有してゐると信ずる。君も是非、それを信じて呉れたまへ。唯過去數百年間、類例のない非合理な政治のために民心が道徳的には墮落し、気力的には萎縮したまでのことだ。これから新しい國民的の感激の中に、精を出したら、屹度立派に内地人と伍して行くだけの能力を回復し發揮することゝ信ずる。

君よ。僕は自惚れてゐるのではないのだ。僕は十分自己反省の功を積んでゐるつもりである。僕は僕自身の醜い缺點をまざまざと凝視してゐると同時に君の優れてゐる諸々の點もよく理解し尊敬するだけの明を備へてゐるつもりである。例へば僕が君より精榊力が足りないとか、君は素直であるのに僕はひねくれてゐるとか、君は責任感が強いのに僕にはそれが足りないとか、君には神佛に對する信心が深いのに、僕にはそれが甚だ薄弱であるとか、また君には刻苦勉勵の気風があるのに、僕は懶惰で姑息的だとか、また僕の方は君の方より不潔であるとか、不親切であるとか、かういふ點は恥かしいことながら、僕はあつさりと承認するよ。しかし僕達一生懸命に、僕の方にあるそれらの缺點を直して行かうぢやないか。否現在も非常な努力で直されつゝあるではないか。僕はかやうに自分の缺點に對して自から痛棒を加へてゐるものであるが、また、僕の方にも長處もあることゝ思ふ。これは僕の口でいふことは止めよう。もしそれが必要とあれば、君方から見付け出して、勵ますなり褒めるなりしてくれたまへ。

だから君、朝鮮の古い文化を全部叩き直す必要はないのだ。内鮮一體は心の間題即ち理想と國民的感情の問題であつてすべてを一色に塗りつぶすことを意味するものではない。況んや、先刻も述べたやうに、朝鮮文化は日本文化と同源であつて同質であるにおいておやだ。

然らば君と僕とは、如何なる線に沿うて努力しなければならないか。それはお互に愛しあひ理解しあひ尊敬しあふことだと思ふ。僕は君を兄分として尊敬しよう。しかし君は僕をむやみに弟扱ひすることを止めよ。君誤解するなよ。僕の提議を能く味はつてくれたまへ。

　かくて僕達はお互を研究しよう、親愛たる兄弟の情愛をもつてお互を知りあはう。さうするには、まづ接觸が第一である。個人と個人、家庭と家庭との、利害關係を離れた、單なる友情的の接觸こそは、相互の理解と結び附きの不二法門なのだ。約一萬人ばかり、兩方接觸して得た内鮮一體促進の効果はそれこそ算數讐喩の能く知るべきでないであらう、その功徳は無量無限であるべきだ。君。君が若し東京にゐるとしたら、東京にゐる朝鮮學生達を君の家庭に迎へてくれないか。暖かく浄らかな、君の家庭の一日は、能く彼等の心の氷結を融解するであらう。

同胞に寄す【8】[[9]](#footnote-9)

究極なるところ

　ところが朝鮮に於てさへ、内地人と朝鮮人間の個人的、家庭的接觸は非常に少ないのだ。お互に役所や會社などでは友人のやうでも、お互を家庭に迎へることは躊躇してゐるやうである。これでは本當の接觸とはならない。

君よ、僕の家庭に來て呉れたまへ。それはむさくるしい、潤のない家庭だ。お茶だつて差し上げられないことが多いであらう。食物にしたつて、君の口には合はないかも知れぬ。しかし、君よ、僕の家族と一緒に夕飯を食べよう。そして、垢の附いた僕の蒲團を掛けて僕の狭い溫突間で、僕と枕を並べて寝ながらしんみり語り合はうではないか。そして僕も君の家庭の美しい奥座敷に請じ入れて呉れたまへ。そして、下手な僕の作法を親切に訂正して呉れたまへ。君の家の素直で、和やかで、親切で柔かい雰園気に僕を浸らして呉れたまへ。

　これだけだよ。結局これだけだよ。君と僕とが、今後四半世紀間誠心誠意努力すべきことは、畢竟これだけなのだ。

　もう擱筆しよう。君は僕のぎこちない言葉を、能くも我慢して聽いてゐて呉れたね。ありがたう。

　『すめらぎのかみときみとにつらなりてやまともこまもひとつなるかも』

再　伸

　これは今年の三月のすゑ頃書いたもので、僕は此の考が正しいか正しくないかを爾来五ヶ月餘も吟味して來た。最近京城日報の御手洗社長に讀んで頂いたら、それで結構と云はれたが。四月以來隨分と内外の情勢は變つてゐる。その一は創氏が全人口の七割九分三厘に達したことだし、今一つは義務教育實変施のことが愈々正式に發表されたことだ。しかも現にその準備は取急ぎ進められてゐて、昭和二十年以内に實施を見るだらうといはれてゐる。

　また、四月以來變つたのは歐洲の情勢だ。歴史も文化も古い數箇國がばたばたと倒れ、かの佛國さへも無條件降伏をしたし、今や英國といふ三百年來世界を我物顔にしてゐた老大帝國の運命もどうやら危くなつてゐる。舊秩序は一掃されて、世界的に新秩序が生れさうである。この事實は日本の使命をもつとはつきりさせたと思ふ。

　有田前外相の聲明により、南洋までもひつくるめた大東亞榮圏の確立が目標となつて見れば、帝國の今からなすべき事業は、東亞新秩序時代よりも倍加したといへよう。從つて人的にも物的にもより大なる資源を要するであらうし、國民の自覚や結束もより緊密に引締めなくてはならないことだらう。

　近衛新體制もこの文を書いてからのことであるが、これによつて朝鮮及び朝鮮人の使命がもつとはつきりして来るし、またその責任ももつと重くなつて來るのではあるまいか。

1. 『京城日報』昭和15年10月1日~9日夕刊3面の学芸欄に連載 [↑](#footnote-ref-1)
2. 『京城日報』昭和15年10月1日3面 [↑](#footnote-ref-2)
3. 『京城日報』昭和15年10月2日夕刊3面 [↑](#footnote-ref-3)
4. 『京城日報』昭和15年10月3日夕刊3面 [↑](#footnote-ref-4)
5. 『京城日報』昭和15年10月4日夕刊3面　ただし、新聞の文字が判読不可能のため、昭和41年1月に博文書館から刊行された単行本『同胞に寄す』の9頁-11頁を底本とした。単行本にはルビがふられていない。 [↑](#footnote-ref-5)
6. 『京城日報』　昭和15年10月5日夕刊3面　ただし、新聞の文字が判読不明のため、昭和41年1月に博文書館から刊行された単行本『同胞に寄す』の11頁-13頁を底本とする。単行本にはルビがふられていない。 [↑](#footnote-ref-6)
7. 『京城日報』　昭和15年10月6日夕刊3面。ただし、新聞の文字が判読不明のため、1941年1月に博文書館から刊行された単行本『同胞に寄す』の13頁-16頁を底本とした。単行本にはルビがふられていない。 [↑](#footnote-ref-7)
8. 『京城日報』昭和15年10月8日夕刊3面。ただし新聞の文字が判読不明のため、1941年1月に博文書館から刊行された単行本『同胞に寄す』の16頁-18頁を底本とする。単行本にはルビがふられていない。 [↑](#footnote-ref-8)
9. 『京城日報』　昭和15年10月9日夕刊3面。ただし新聞の文字が判読不明のため、昭和41年1月に博文書館から刊行された単行本『同胞に寄す』の18頁-20頁を底本とする。単行本にはルビがふられていない。 [↑](#footnote-ref-9)